
Broom Sisters Zero

555

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Broom Sisters Zero

【Nコード】

N6172I

【作者名】

555

【あらすじ】

1908年6月30日のシベリアでの謎の爆発が発生。世に言うツングース大爆発である。

30数年経過後の、1943年1月10日。戦時中の帝都の空に謎の飛行物体が飛来した。

事態の収拾にあたる、帝国陸軍近衛大佐伊集院忍と陸海軍の面々。果たして、迎撃は成功するのか？

（本ストーリーは某巨大掲示板のカテゴリ「趣味」「軍事」の「中

高一貫の防衛女子校設立」スレッドに投稿した「Broom Sisters」が最初に騒動に巻き込まれるきっかけになった事件です

ブログ（前書き）

某巨大掲示板のマニアックに分類されるスレッドに投下されたSS
元ネタをきっちり書かねば…と、一念奮起して書き始めました

プロローグ

- 明治41年6月30日 北緯60度55分 東経101度57分 -

太陽系第三惑星、地球は、同じ恒星系を構成する他の惑星とは幾分異なる組成で構成されている。

ナトリウムが大量に溶け込んだ水が惑星の7割を覆い、大気中に窒素と酸素が充満し、中途半端に傾いた自転軸のため、1公転毎に微妙な気象変動が発生する。

そのため、恒星からの放射熱を十分に受けることのできない、極地と呼ばれる自転軸周辺の地域でも、地表が暖められ、わずかに融点を超えた大地の表面に、植物が自生し、それを滋養とする繊毛類や、更にそれを食物とする昆虫…そしてこの地の食物連鎖の頂点に辛うじて君臨している人類と呼称される生命体とその生命活動を続けていた。

1億年単位の長く、単調な時間軸の遷移を経て、惑星上の生命体の頂点に君臨する生物が何度か交代した、およそ45億公転周期。現在の生命体の頂点、人類に、大いなる福音をもたらしたと言われている生命体が誕生し、1907回と半分の公転周期を数えた頃、北極圏と称される北半球の極地に異変が生じた。

この時期。地球の傾いた自転軸のため、北極圏は太陽からの放射光を遮ることはできない。夜は短く、もしくは存在せず、逆に昼が長い。人類はこれを白夜と呼んでいた。

現地時間、午前7時。休息を終えた生命体が活動を開始し始めた頃、融解した凍土に根を下ろした針葉樹林帯の上空に、閃光が走り北の空が二つに割れた。

永久凍土の続く地域に走る川、ディリシユマ川の河口の周辺で生活していた、少数民族。エヴァンキの簡易住宅チュムに、北の空が割れた時から、僅かな時間をおいて熱線と衝撃波が襲いかかり、チュムは軒並み吹き飛ばされ、野外に干してあった毛皮や衣類は、焼け焦げ、地表の乾いた大木、枝やトナカイゴケは盛大に燃え上がった。

ツングース大爆発である。

惑星規模での逆位置、南緯77度32分東経167度17分付近で、極点を目指すべく越冬中のイギリス人の探検隊の一行は、雲間から非常に明るく大きいカーテン状のオーロラを観測した。

爆発を目撃した住人は、後年、興味深い証言を残している。

- A k s e n o v I v a n I v a n o v i c h の証言 -

24歳のアクセノフは他のエベンキ人のグループとともにヤククタ川の河口付近に居た。

彼らは4つのチュムで生活していた。アクセノフは早朝チャンベ川へ、ヘラジカ狩に行った。マキキタ河口より上流で獲とめたヘラジカの皮をはぎ、臓物を抜いていた。獲物の身体にかがみこんで仕事をしていたとき

「突然すべてが赤くなった」驚いて頭を上げた「その瞬間、衝撃があった」そしてしばらく気を失っていた。

意識を取り戻すと周囲の木々が倒れ、燃えていた。空には神が飛び、悪魔が飛んでいた。悪魔の身体は短く明るく、前方に2つの眼があ

り、後ろは燃えていた。怖くなって衣服を着て祈った（異教の神ではなくイエス・キリストとマリアに祈った）。

（1967年KSEの聞き取り調査による）

衝撃の中心から、半径約30キロメートルが炎上し、約2、150平方キロメートル（およそ45キロメートル四方）の範囲の樹木がなぎ倒された。

後年、TNT火薬換算10 - 15メガトンに相当すると算定された、爆発の中央部。そこは、全ての生命体とその活動を停止していた。

一部の、ごくわずかな例外を除いては…

爆心地近くでくすぶり続ける針葉樹林の近く。吹き飛ばされたチユムの残骸の中で、背中を丸めるようにして、息絶えた人間であったものの陰から、弱々しい鳴き声が、響いた。

咄嗟に我が子を庇い、そのまま熱風を浴びたのか。

泣き続ける赤ん坊のの声に呼応するかの様に、上空から、“天使でも、悪魔でもない”、青白く光る飛行物体が近づいてきた。

ブローグ（後書き）

KSEは、1959年ロシア・トムスク大学の若手研究者や学生を中心に結成された、ツングース力異変を調査する、総合自主探検隊（Комплексной Самодетельной Экспедиции）の略称です

帝都の恐慌（前書き）

ミッドウェイで、まさかの大敗退。戦局が観し難い状況に陥っている大日本帝国。その帝都に、謎の飛行物体が出現。伊集院忍近衛大佐は、すぐさま行動を開始した。

帝都の恐慌

- 昭和18年1月10日深夜 東京 -

冬の帝都に響く、けたたましいサイレンの音で目覚めた大日本帝国陸軍近衛師団大佐、伊集院忍は、寢室の窓を開け放ち開き夜空を見上げる。

帝都には珍しい洋風建築の伊集院邸の2階の窓から、見上げた灯火管制された帝は、闇に伸びる地上からの探照灯の長い光と、鳴り響くサイレンとの音で満たされていた。

「奴だ。この時期に…何たることだ！」

帝都周辺の高射砲陣地からの対空砲火と、地上から伸びた探照灯の光の先には、ひしゃげた球形の物体が青白く輝きながら浮かんでいる。実際はかなりの速度で「飛んでいる」はずなのだが、「浮かぶ」と表現した方が適当に思える。

サイレンに混じって降ってくるエンジン音は、夜間強行出撃を行った戦闘機らしい。時折、探照灯の光の帯を飛行機らしい影が掠める。

「無茶をする」

夜間出撃が可能な戦闘機が帝国陸海軍航空隊に配備されたという

話は、伊集院の耳には入っていない。下手をすれば墜落の危険性である。

帝国陸海は持てる力の全てを投入して攻撃を加えているのだろうが、飛行物体は動揺した風もなく、ゆっくりと、またある時は、物理法則を無視するかの様な急激な機動をとって、帝都の空を遊弋していた。

「高射砲では太刀打ちできん」

白く変色するほど握りしめた窓枠の手を引きはがし、半ば無念の表情を滲ませると、彼は踵を返し、彼の最優先の任“玉体の安寧”に就くべく夜着に手を掛けた。

と、彼の細君があり得ない時間帯の来客を告げた。

「大佐殿。お迎えです」

「待つてもらってください。今、行きます」

戦局の悪化もあり、近衛師団の大半はすでに海外に転出している。現在、居残っているのは儀仗と皇宮警護程度の要員程度だ。この時間帯、基本、最低限の警備要員しか置かれていないはずの師団の素早い行動に疑問を覚えながら、軍服に着替え、玄関に歩を進めると、空冷V型2気筒エンジン音を響かせているサイドカーの傍らで、若い士官が伊集院を敬礼で迎えた。

「大佐殿。坂鬼少尉、お迎えに上がりましたっ！」

「早いですね」寒気で青白くなった顔の坂鬼少尉に、伊集院は形式どおり、きつちりと答礼した。

「（この有様では）電話なぞ役に立ちません。指揮官が必要と考えました！」

深夜にこの状況进行处理するだけの電話交換手の数は揃っていない。良い判断と言える。心中で、部下の判断に高い評価を与えるながら、伊集院は逆の言葉を発した。独断専行は軍隊では褒められるべき事ではない。

「指揮系統は無視ですか？坂鬼少尉？」

伊集院の言葉に、坂鬼少尉は悪びれることなく笑顔で応えた。

「真つ先に、当直士官殿に、大佐殿に連絡をせよと指示されました。それに、何せ火急の事態であります」

「他力本願ですね。当直は？」

まんざらでもない様子でため息をつく、伊集院は当直士官を尋ねた。近衛に限って、間違いなぞないだろうが、軽率な行動をされ

ては困る。

「東郷中尉殿であります。中尉殿も、自分では資力が不足している
と言っておられました」

坂鬼の言葉に伊集院は苦笑した。

「そんな事では、出世できませんね。よし、出ましょう」

いつの間にか伊集院の後ろに控えた細君に、外套を羽織らせさせると、伊集院は彼女に告げた。

「しばらく帰りません。留守を頼みます」

「おかまいなく。私はよろしくやっていますわ」

異常な事態にもかかわらず、全く動じる風を見せず、細君は笑顔で彼を送り出す。

サイドカーのエンジン音は夜空に林立する探照灯の光の中に消えていった。

- 昭和18年1月11日 近衛師団 -

訳も判らぬまま、右往左往する警察官と憲兵隊、軍関係の車両と

人を避け、伊集院を乗せたサイドカーが近衛の門を駆け抜けた頃には、既に日付が変わっていた。

この混乱状況で、なおかつ夜間だ。出仕している兵は、そう多くなかろうと踏んだ伊集院だったが、予想を裏切り、ほぼ全員の兵が活動を開始していた。

「情報収集の必要はありません」

自らの練兵の結果に満足しつつ、司令部に歩を進めた伊集院は、部下達にこう宣言し、彼の方針をいつもの様に丁寧な言葉遣いで明らかにした。

「どうせ、陸軍と憲兵隊が情報を根こそぎ持って行くでしょう。我々が根掘り葉掘り聞いたところで時間も無駄です」

「それでは、我々は何をすれば？」

当直士官、東郷中尉は、誰もが抱く疑問を代表して伊集院に投げた。

「ここ（近衛）に帝都防衛を担う実務部隊の担当者を集結させます。留守番程度の人員しかいない近衛に、これ以外できることはありません」

幕下の様子を確認し、伊集院は続けた。

「陸海軍にやらせていたら、主導権争いだけで日が暮れます。本件は近衛が仕切ります。玉体護持は近衛の責務です。そのためなら、いかなる手段を採ってもかまいません。あらゆる手段を講じて、連中をここ（近衛）に集合させるのです」

全員の理解を確認した伊集院は、具体的な指示を始めた。

「午前9時に陸海軍の合同会議を開催します。会議室と、簡単な兵棋演習の準備。それと、関東一円の陸海軍の拠点への即時電話連絡が可能のように、逋信省へ専門の交換手を手配してください。不足しているのなら、帝都周辺の工場の電話交換手を徴用してもかまいません」

敬礼して部屋を飛び出していった、新品少尉の頃からの付き合いの最前任下士官を横目で見送り、伊集院は次の命令を下す。

「坂鬼少尉は、内務省と共同で新聞社に……そうですね。夜間防空訓練が抜き打ちで実施されたと報道させるように。“あれ”は防空演習用の新型気球だとか何とか理由を付けて下さい。軍令部、警視庁、憲兵隊の面子を潰さなぬよう。留意願います」

「東郷中尉は、軍令部、陸軍航空本部に出席要請をお願いします。“強要”してください。忙しいと言われるに決まっていますから、

“あれ”に関する有力な情報と、その対策を近衛が持っていると伝えて参謀格、できれば本部長級を必ず出席させてください”

「策がおりですか？」

思わず問い返した東郷中尉に、伊集院は苦しい笑顔で応じた。

「そう言うことにしておいてください。それでも駄目なら…非公式だが勅命が発せられたとねじ込んで下さい」

「勅命っ！それは…」

「了解しました！」

不安なつぶやきが聞こえた。偽勅が露見すればタダでは済まない。誰かが何かを言おうとしたのを強引に遮り、東郷中尉が全員の不安を押し込める。

緊急事態とは言え、偽勅まで行使しようとする伊集院の行動に近衛留守番部隊は、驚いていた。普段の彼からは全く考えられない

「海軍軍令部に、至急面会を取り付けて下さい。私が出向きます。車では面倒です。馬か、サイドカーの準備を…」

と、扉が開き、当直の侍従が困惑した顔で入室してきた。

「伊集院大佐。侍従長からです。陛下が散策をされるので、警護を大佐殿にお願いしたいとのことですよ」

小さく頷き、伊集院は皆に聞こえるよう、大きく呟いた。

「深夜の散策ですか…偽勅じゃなくなりそうですね。すぐ参上致します」

闇に棲む者

- 昭和18年1月11日 皇宮 -

暖房が落ち、冷え込んだ御文庫…前年秘密裏に竣工した、耐爆を施した秘密の御所に向かう廊下を進む伊集院と、当直の侍従の周囲に、突然闇が広がった。停電？反射的に灯り…覆いで光量を絞られた電球を見るべく、天井に視線を飛ばすと、そこからもじわじわと湧き出す様に闇が落ちてきた。

現実離れた事象に狼狽する侍従を護る様に、伊集院が闇の奥に正対する。と、闇の中から嘲るような声が飛んできた。

「随分、大事おおごとになっている様だな。伊集院」

「貴様が、よく入り込めたな」

闇から溶け出すように現れた陸軍の軍服をまとった壮年の男は、口の端に不気味な笑みを浮かべる。

「土御門にも遣える者がいない。これしきの騒ぎで結界が綻びる。入り込むのはさほど難しくはなかったぞ、伊集院。召集令状ごとき、奴の力でどうにかなるだろう？あまりにも手応えがないので呆れてしまったぞ」

軍服の階級章は中尉のものであるにも係わらず、不遜な態度で伊集院「大佐」を揶揄する。

「陸海軍の統帥でありながら、人事に口を出せない。貴様が考えるよりも陛下はご不自由であらせられる。ここも、結界を張るので精一杯なのだ。どうだ？この守護を担ってみないか…」

男の態度を気にとめず、唇に涼しい笑みを浮かべて伊集院が答える。伊集院の言葉に、男のこめかみが痙攣した。

「ここが米軍の攻撃『ごとき』で陥落する訳がなかるう。で、“あれ”は人外のものだな？」

「貴様とは別の意味でな。私もこっぴどくやられた。貴様は手を出さん方がいい。傲岸不遜が貴様の看板だ。手酷くやられてしまうと、廃業しなければならんぞ？」

「ほざくな！俺は俺の流儀でやらせて貰う。邪魔するなよ…」

吐き捨てるように伊集院に念押しをすると、再び男の姿が闇に溶けた。と、周囲が一瞬で明るくなる。

「何者ですか？」

血の気の引いた顔で侍従が伊集院に問いかけた。

「皇宮…いや、“帝都”の備品といったところです。悪霊、怨霊、妖怪、貧乏神の類ですが…奴が居る限り玉体は、安泰でしょう」

「味方なのですか？」

「常に宮家に災いをもたらそうとしていますので、味方とは言えませんが。いつもは結界に阻止されるのですが、この騒ぎに乗じて侵入してきたようですね。それも、我々に顔見せをするためだけに」

「災いですか。しかし、宮城の守護を頼まれたのでは？」

「『敵の敵は味方』というやつです。残念ですが、敵にさえ頼らなければならぬ状況にあるとお考えください」

伊集院の言葉に、再び侍従の顔色が悪くなった。

「もし、米軍が助力してくれるのなら、私は真っ先に飛びつきます。これは、そのような事件です。が、ご安心ください。ここから先は、我々軍隊と…護役の仕事です」

闇に棲む者（後書き）

短いのですが、帝国軍側の戦力が少なすぎます。助っ人の1人や2人は必要でしょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6172i/>

Broom Sisters Zero

2011年10月26日13時58分発行